

委託事業実施内容報告書

平成22年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語教室の設置運営】

受託団体名 日本語ボランティアわらび中央

1 事業の趣旨・目的

当団体は、週に二回年間を通して非日本語話者を対象としたボランティアによる日本語教室を開催(21年度実績 89日開催 受講者延957人)しているが、本年度は、講師を招聘して、非日本語話者への教授を実施することを主とし、併せてボランティアのスキルアップを図ることを目的としたワークショップ方式の日本語特別教室を開催する。

2 運営委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
平成22年 5月12日	蕨市中央公民館	松尾恭子 坂本 晃 石丸岳広 佐藤寛太郎	・日本語教育事業受託団体となった経過 ・特別教室の開催実施計画	受託団体となった経過の報告と、松尾講師による特別教室の実施計画を策定した
平成23年 3月22日	蕨市中央公民館	坂本 晃 石丸岳広 佐藤寛太郎	・特別教室の成果と今後	非日本語話者の募集方法の改善 ボランティアのスキルアップ(自主研修)

【写真】

3 日本語教室の開催について

- ① 日本語教室の名称 日本語特別教室および特別集中講座
- ② 開催場所 蕨市中央公民館
- ③ 学習目標

日本で生活するにあたって必要とする日本語をとりあえず習得することを主眼とし、併せてボランティアのスキルアップを図る。

- ④ 使用した教材・リソース 「リソース型生活日本語」目次翻訳集(AJALT 編纂)
「にほんごこれだけ」(ココ出版)

④ 受講者の募集方法

受講者(非日本語話者)は、通常の日本語教室で参加募集を行った。

⑤ 受講者の総数 26人 (延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

(出身・国籍別内訳 中国 20人、ブラジル 1人、バングラデッシュ 1人、
インド 1人、韓国3人)

⑥ 開催時間数(回数) 20時間 (全 6回)

⑦ 語教室の具体的内容

回	開催日時	時間数	参加人数	国籍・母語 (人)	教授者・補助者人数	内容
①	7月14日	3時間	10人	中国(中国語) 10人	教授者 1人 補助者 12人 (補助者はボランティア)	・生活日本語学習 「リソース型生活日本語」目次翻訳集をもとに、受講者が必要とする項目を選択させ、それに対応する日本語の習得を教授。
②	7月21日	3時間	11人	中国(中国語) 9人 バングラデッシュ 1人 ブラジル(ポルトガル語) 1人	教授者 1人 補助者 12人	・生活日本語学習 前回と同じ方式の教授。
③	7月28日	3時間	12人	中国(中国語) 10人 ブラジル(ポルトガル語) 1人 韓国(韓国語) 1人	教授者 1人 補助者 12人	・生活日本語学習 前回、前々回と同じ方式の教授。
④	8月4日	3時間	13人	中国(中国語) 10人 韓国(韓国語) 1人 ブラジル(ポルトガル語) 1人 バングラデッシュ 1人	教授者 1人 補助者 12人	・初級者への日本語習得法学習 「にほんごこれだけ」(ココ出版)を教材として、日本語に初めて接する人たちへの対応と日本語の教授。
⑤	11月24日	4時間	11人	中国(中国語) 9人 インド 1人 韓国(韓国語) 1人	教授者 1人 補助者 12人	・ボランティアによる日本語教授を、教授者が指導監督し

						ながら、外国人受講者の日本語習得にあたる。 ・「にほんごこれだけ」(ココ出版)
⑥	11月26日	4時間	12人	中国(中国語) 10人 インド 1人 韓国(韓国語) 1人	教授者 1人 補助者 12人	・ボランティアによる日本語教授 ・「にほんごこれだけ」(ココ出版)

⑨ 特徴的な授業風景(2～3回分)

(特徴が最もよく表れた日の授業報告を詳細に記載。また、教室風景の写真を数枚添付。)

・前半3回は“「リソース型生活日本語」目次翻訳集(AJALT 編纂)”をもとに、受講者が日常必要と考える生活場面を書き出してもらい、その要望に関連する日本語習得の教室とした。要望が多岐にわたったので、教授者一人で受講者全員への対応は困難なため、当グループに所属するボランティアが補助者として活躍することとなった。

この3回の教室には幼児2人(中国)も参加し、幼児教育に精通したボランティアがあたり、楽しく学習していた。

日本の高校進学希望を持つ子の母親(中国)から“いかにすべきか”の要望が出され教育委員会等への問い合わせを実際に行った。

妊婦(中国)は、「母子手帳」「児童手当」「出生届」を学び、その後無事出産。

・8月4日の教室は、11月に行う教室の事前学習のかたちで実施。「にほんごこれだけ」(ココ出版)を教材として使用。当教材は、日本語をほとんど話せない人への日本語習得を助成する内容を持つもので、この教室から、受講者を日本語習得のレベルによりグループ分けをし、教授補助者として参加しているボランティアによるワークショップ方式で実施した。

教授者は、各グループを巡り、受講者への教授とボランティアへの助成をする形で教室の運営がされた。

・後半2回の教室は、前記「にほんごこれだけ」による教室運営とし、受講者への教授の中心は補助者のボランティアのワークショップ方式で実施。もちろん教授者は、受講者、補助者への実地教育を実施した。

⑩ 活用した日系人等(日本語を母語としない)の名簿

氏名	母語(国籍)	来日年(日)数	参加回数	当該教室での役割
----	--------	---------	------	----------

なし				

⑪ 支援者の名簿(⑩以外)

氏名	所属	専門分野及び日本語教育に関する資格	参加回数	当該教室での役割
なし				

※ボランティアのみ

4 事業に対する評価について

① 当初の学習目標の達成状況

「リソース型生活日本語目次翻訳集」により受講者(非日本語話者)が学習要望項目を書き出し、それを解決する方向での日本語習得授業となった。要望が多岐にわたったのでボランティアとボランティアを希望する者も教授補助者として参加し、要望に対応する授業形態をとった。

その後の経過では、受講者それぞれが初期の要望を充分といえないまでも達成させたものと判断する。例えば、妊娠していた受講者が「母子健康手帳」「出生届け」「児童手当」を学び、その後無事出産した例など。。

② 学習者の習得状況

受講者は、積極的に日常必要と思える事項を数多く提出したところを見ると、大いに興味をもってこの授業に参加できたものと考ええる。

さらに、特別教室に続く通常の日本語教室へ、多くの受講者が通い続けてくる中で、日本語習得の実が挙がっていると思える。

なお、この年度の「日本語能力検定試験」で、1級合格者3名、2級合格者2名が出ている。

③ 日本語教室設置運営の効果、成果

松尾講師の熟達した指導により、受講者は生き生きとまた楽しく受講できたものと判断する。前半3回の受講者のなかから何人かの者が就業できたと聞くにおよび、その成果が充分あったもの判断している。なおまた教授補助者のボランティアも、受講者への教授のノウハウを実地に習得でき、大きな自信を得られた。

④ 地域の関係者との連携による効果, 成果 等

就学援助を必要とする受講者の家族(子息)には,教育委員会との連絡を取るなどの連携を図った。

また従来から何かと援助をいただいた蕨市中央公民館と、今回の事業を機会にさらに連携の強化を図ることが出来、将来の事業につなぐことを運営委員会で確認できた。

⑤ 改善点, 今後の課題について(具体的に記述する。)

a. 現状

受講者の出入りが激しく(今回の事業実施中、前半受講者と後半11月の受講者がほとんど入れ替わった)、前後半を通しての受講者は多くはなかったが、現状では常に10名前後の受講者を迎えている。

b. 今後の課題

受講者のレベルが一定ではなく、しかも出席が定かではない日本語教室で、日本語教授内容をどう高めるかが大きな課題といえよう。

c. 今後の活動予定, 展望

ボランティアの質を高めるため、自主研修をここ数年実施してきたが、さらに充実させることとした。

他の日本語ボランティア団体との交流を深めることにも意を注ぎたい。

③ その他参考資料

※写真は, 肖像権等に配慮し, 差し支えないものを添付すること。